

私の抑留生活

愛媛県 山村 真

私は大正十三（一九二四）年に百姓の次男坊に生まれましたが、当時は学校へ行くよりはすぐ戦争に参加することが、私どもの田舎では当然のように言っておる時代でありました。しかし、しばらくの間、山口県の光に呉工廠の姉妹工として誕生した軍事工廠に三年ほど勤務をすることになりました。けれども、大東亜戦争の開始以来のすさまじい日本軍の勝利の声がしだいに細くなり、厳しい玉砕の報が、南方の島々、そしてまた連合艦隊司令長官の戦死などがありました、一にも二にも若い男は戦場へということ、配属将校たちの奨めもありまして、陸軍特別幹部候補生として三重県鈴鹿に入隊をいたしました。

基本教育を受けまして、直ちに満州に展開をいたしました。十八、九歳以上は海外、そしてそれ

未満の人たちは内地のそれぞれの現場に展開していきました。私たちは厳しい統制管理の中で、親に会うこともできません、博多から釜山へ、そして朝鮮半島、当時の満州国新京（長春）にありまして第二航空軍司令部に、晴れて関東軍の一員として満州の土地を踏みました。十二月の暮れでございましたが、やっぱり既に満州はとても寒くて、これはなかなかのことであると。団体生活を二、三年しておりましたけれども、軍隊はまた特別のものでございました。

そういったことの中で、満州におきましては、南方の、あるいはまた沖縄の厳しい状態は聞かされることはなくて、広い高原で高層気象観測の訓練に励んでおりました。

ある日、満人の農家の方が一握りのキュウリを持って練習場へ顔を出しました。「食べなさい」といったようなことで、皆が「ありがとう」とキュウリをごちそうになって、そして、対空無線のスイッチを入れましたときに、ポツダム宣言条約

を知ることになりました。けれどもそのことは航空気象観測、気球を上げておるときにしか使われない対空無線でございましたので、上官にも告げることはできません、私と数人の戦友で、デマだと思ふけれども、一抹の不安を覚えながら若干の日にちが流れましたが、突然、八月九日の朝、満軍の部隊かなと思っておりましたけれども、そうではなくて、やはりソ連軍の越境攻撃があったということの知らせを聞くことになりました。

直ちに連隊本部へ私たちは一部代表として十人が急行いたして、部隊の中を見せていただきましたけれども、既にそういつたことは伝わっておりまして、厳しい状態が、初めて見る関東軍の厳しさを目の当たりにしました。

そして、運命の八月十五日が来ました。私たちは部屋の中央に据えつけられました古いラジオに向かつて太田連隊長、中佐でございましたけれども、命令でラジオに向かつて敬礼をいたしました。おそらくは一億玉砕の構えを持って軍がしつかり

と頑張れ、頑張ってほしいという言葉が聞かれるものとして、止血棒を握りしめて聞いておりましたけれども、ラジオははつきりとした言葉にならず、そしてまた天皇陛下の最も悲しい、初めてお声を聞くわけでございますが、敗戦の実態を承知したわけでありませぬ。

軍人として、ほんとうは、わずかな使命かわかりませぬけれども、私たちは非常にくやくて残念で気の合った四、五人で白虎隊の故事にならってここで自決しようということ、数人がひそかに部隊の裏のレンガ塀のところに集まりました。部隊では既に、兵器を落とす音、あるいはまた暗号文書の焼却に当たるいろいろな関係も含めて、部隊ではハチの巣を突いたようなことになっておりました。私たちは黙ってゴボウ剣を抜いて、私がちよつとさわってみましたけれども、とても切れるようなものではございません。そうしたら、この塀に向かつて研ごうということで、ごしごと研いでおりました。

たまたま私たちの上官でありました長崎の中島少尉が、私たち特幹生がいないので心配をして、短剣を廊下に落としました。そして、少尉が、「部隊長が命をかけても皆さんを日本に送り帰す。そして、日本の復興のために懸命に頑張ろう。軽挙妄動はまかりならん」といったような論しを私たちは無視しようとしたのです。もしあれを実行していたら、今の自分もありませんし、シベリアの抑留の惨事も体験することがなかったと思いますけれども、そういった一幕があつて、若い特別幹部候補生としてお国のためと思つたことが、私たちの力の限界を知ることになりました。

やがて部隊はいろいろな角度で終戦の構えに移りました。ソ連の無条件降伏を裏づけするように、また敗戦を促すように、いろいろな角度で一千余人の部隊を歩かせて、一週間も満州の荒野をさまよいました。雨の露を口にし、まだ実りが少ない南京のカボチャの実をかじりながら、ブラゴイ、

そしてまたバイカル湖を経てイルクーツクの収容所に行くという歩みをしたわけでありました。

そしてたくさんさんの、六十万なら六十万、百万なら百万の一人一人が体験をしましたことの中でございませけれども、平和の礎の碑の中に、九百六十数人の方々がそれぞれ体験談を投稿されておりまして、そういった書物になり、瀬島龍三さん、あるいはまた数えきれない有名な方々がシベリアの悲惨を図書にし、あるいは吉田正さんの「異国の丘」も含めて、たくさんさんの生きて帰れた人たちが後世に伝えるべくそういった、画家の吉田勇さんは絵筆でもって……、そういう中で私がお話をするほんとうの願いは、シベリアで亡くなった人たちの無念さが家族を通じ、そしてまた多くの方々があえてシベリアを墓参訪問しながら工業を介して日本の復興を誓う、そしてまた平和を約束する、そういった言葉を供えながら、山本会長ほかたくさんさんが、愛媛でもシベリアを訪問されております。私も平成十（一九九八）年に参りま

したけれども、やはりこの無惨なありさまを、日本の多くの人たちにほんとうは知っていただきたい。ソ連の個人個人を憎む心は別といたしまして、やはり帰ってきた日本、会いたいかった父母、そして子供に、そういったことも一切できずに、寒い、ひもじい、厳しい労働、そして南京虫やしらみに寝ることもできないような苦しい生活環境の中で過ごしたわけでございます。

長く生きておりますと、老兵の胸は言葉になりませんからこれで終わりますけれども、この問題はやはり若い人にも、あるいはまた戦争体験者にも、たくさんの人たちに現実を知っていただいて、シベリアの碑をお参りしていただきたい。そして、すばらしい日本と言われるためには、こうした多くの人たちの悲しい死を無駄にするような日本人ではないことは分かりますけれども、しっかりと自分を、家族を、そして周辺を、国を、世界に負けないようなよい日本になってもらいたいと思います。